

月報

No.456
2018年
5月



日本キリスト教団
茅ヶ崎香川教会
茅ヶ崎市香川1丁目34-35
<http://kagawachurch.jimdo.com/>

説教 『 神はイエスを信じる者を義とされる 』

ローマの信徒への手紙 3章25節～26節

小河信一 牧師

ローマの信徒への手紙 3:25-26——

25 〈福音→〉 神はこのキリストを立て、その血によって信じる者のために罪を償^{つぐな}う供え物となさいました。〈←福音〉（それは、今まで人が犯した罪を見逃して）、①神の義^ぎをお示しになるためです。26（このように神は忍耐してこられたが）、今この時に②（神の）義を示されたのは、③御自分が正しい方であることを明らかにし、イエスを信じる者を義となさるためです。

本日は、短い聖句ですが、福音的文章であり、ローマの信徒への手紙の中心の一つと言われる箇所に耳を傾けましょう。そうして、この御言葉を信仰の糧として、この一週間歩んでいきましょう。

ところで、聖書学者・U.ヴィルケンスは、「この両節の文章は非常にごたごたしたものとなってしまっている」と述べ、その理由は、パウロがすでにあつた伝承を活用し、そこにまた彼が修正・付加を施したからである、と分析しています。そう言われれば、ごたごた・ごてごて飾り立てられているようにも思われます。

私見を言えば、確かにこの両節は重厚・難解であるけれども、しかし、無駄な語句などまったく無く、福音が明々白々に語られています。座右の銘にすべき聖句です。雑然と重要な語句が入り混じっているように見える「ごたごた」感が解きほぐされるように、秩序立てて説き明かしましょう。

ローマの信徒への手紙 3:25——

〈福音→〉 神はこのキリストを立て、その血によって信じる者のために罪を償^{つぐな}う供え物となさいました。〈←福音〉

後で詳しく説明しますが、（ ）の部分とそれ以外の部分を分けて読むと分かりよいでしょう。（ ）の部分を除いたところが、いわば本筋・本論です。すると、冒頭に〈福音〉が置かれているのが、一目瞭然です。

そのように、福音の骨格たるローマ 3:25-26 において、初めに福音が配置されているのは、私たちの信仰と日常生活において、福音が土台になっていますか、という問いかけとして受け止められます。

「神はこのキリストを立て、その血によって信じる者のために罪を償^{つぐな}う供え物となさいました」という文に、十字架と復活という言葉は出て来ませんが、これは福音そのものです。この文を言い直すならば、「父なる神は御子、イエス・キリストを遣わして、十字架において私たちの罪を贖ってください、私たちに永遠の命に向かって生きる希望を与えてくださった」となります。

繰り返しますが、福音が最初です。喜びの知らせに耳を傾けることから、私たちの信仰生活は始まるのです。今、闇の中にたたずんでいようが、あるいは、悲しみの涙にくれていようが、です。私たちは、主イエス・キリストによって、御子の尊い血潮によって、救われたのではないか、そのことを念頭に置こうではないか、というパウロの強いメッセージです。

次に、パウロは3回、「神が正しい（義しい）ことが示されました」と反復しています。

ローマの信徒への手紙 3:25-26——

25 (神の救いの業が成し遂げられたのは) ①神の義をお示しになるためです。

26 今この時に② (神の) 義を示されたのは、③御自分が正しい方であることを明らかにし、イエスを信じる者を義となさるためです。

単純に言えば、パウロは「神が正しい」と3度、連呼しています。そしてこれが、ごたごたの一要因だったのです。

「神が正しい」と言われても、普段、神は目に見えないし……いやもちろん、「神が正しい」のは当然だが、それが自分にどう影響すると言うのか……「自分が正しい」かどうかなら、自分の問題なのだが……

というように、思考の迷路に入り込んでしまいます。

私たちは、パウロが福音と共に、神の義の啓示について丁寧に説き明かしていることを、謙虚に思い巡らすべきです。

世の中、ある意味、不正にまみれています。自分を省みても、いつも正しいことを行っているとは言えません。そうした中でこそ、どっしりと正義の神がおられるということが、全世界の救いの源であり、これから人類が生きていく際の希望であります。そして、このような形で、神ならびにキリストのことが告知された後に出て来るのが、次の一文です。

ローマの信徒への手紙 3:26——

今この時に (神の) 義を示されたのは、御自分が正しい方であることを明らかにし、イエスを信じる者を義となさるためです。

取るに足らない人間、罪深い者であった一人ひとりを「正しい」者とする、との一文です。驚くべき宣言文です。あり得ない事ではなく、福音の故に、神の義の啓示の故に、あり得る事なのです。

私たちに求められているのは、ただ信じること、と同時に、神が「正しく、清く」あられるように、私たちもまた「正しく、清く」生きることです（参照：讚美歌 I - 452 番）。ローマ 3:25-26 の最後に「イエスを信じる者を義となさるためです」が置かれているのは、この結語が、圧倒的な力と愛を持っておられる神への、つまり、わたしを救ってくださった神への応答・感謝をあらわしているからです。

世の人から後ろ指をさされることがあるかもしれない、また、私たち自身、罪を犯し続けるかもしれない、そこでこそ、私たちを「正しい」を宣告し、私たちを罪悪から守ってくださる神を「信じる」のです。その信仰すら、父なる神が主イエ

ス・キリストの十字架と復活の出来事によって、私たちが「信じられる」ように導いてくださったものなのです。

ここまで、あらましの説明だったのですが、どうして、ルターやカルヴァンなど宗教改革者がローマ 3:25-26 を「福音的重要聖句」として注目したのか、少しご理解いただけたかと存じます。そこで、最初の福音に帰ります。

ローマの信徒への手紙 3:25——

〈福音→〉神はこのキリストを立て、その血によって信じる者のために罪を償う供え物となさいました。〈←福音〉

「神はこのキリストを立てた」、すなわち、父なる神は、ダビデの町ベツレヘムに人の子として生まれさせるような形で、御子を遣わされました。闇の底にいる人間を包み込むように、神の憐れみが降って来たのです。

そして、続く文「その血によって信じる者のために罪を償う供え物となさいました」によって、御子派遣の究極目的が提示されています。ただし、ここでパウロは神がキリストを「十字架につけられた」ということを、「その血によって信じる者のために罪を償う供え物となさいました」と表現しています。なぜ、このような難しい説明をしたのか、と思いますが、実は、ユダヤ人にとって看過できない「聖書」的表現だったのです。

そこで、パウロの用語「罪を償う供え物」を理解するために、その元となった旧約箇所を参照致します。

出エジプト記 25:17 幕屋の備品制作の指示——

次に、贖いの座を純金で作りなさい。寸法は縦二・五アンマ、横一・五アンマとする。

「贖いの座」（カッポーレト 出エジプト記 25:17,18,19,20,21,22）というのは、契約の箱を覆う蓋でありました（参照：ヘブライ人への手紙 9:4-5）。そして、その蓋には、一對の金のケルビムが両端に据え付けられていました。いずれにせよ、十戒という神の言葉を納めた聖なる箱にまつわる貴重な物だったのです。

パウロは、この「贖いの座」と「罪を償う供え物」とを連結して、共通するところの意味を語っています。なぜ、その二つがつながるかと言えば、それは、こうです。

主イエス・キリストの十字架の御業が行われる場所は、旧約の時代から預言されてきました。それこそが、「贖いの座」です。そして、「贖いの座」が、主の十字架の御業に通じるのは、その原意が「罪を覆う蓋」だからです。「罪を覆う」と「罪を償う」とは、神の愛と義のもとに、人が罪から潔められ、罪の代価が支払われて、罪赦された者とされるという点で共通しています。

ユダヤ人たちは「贖いの座」と言われれば、金製のケルビムが翼を広げていた、この高価な蓋、それ自体と共に、自分たちの罪の汚れが神の赦しによって覆われるということを思い起こしていたのです。

今、パウロは敬虔なユダヤ人たちの宗教儀礼を活用しつつ、「罪を償う供え物」（ヒラステーリオン）という用語を持ち出して、主の十字架の真意を説き明かしたのです。それによって、いにしえの昔、選民イスラエルの時代から、神は人間を見捨てることなく、その罪科を覆い続けてこられたことが明示されました。そして今

や、単に土をかぶせて、人の罪を覆い隠す（参照：創世記 4:10、ヨブ記 16:18）という時代は過ぎ去りました。今や、主イエス・キリストの十字架の御業が成し遂げられ、単に罪が見えないように覆われたというのではなく、潔めの力または無償の赦しにより罪が償われたのです。それが、私たちにとって、思いがけない喜ばしい知らせ、福音なのです。

ローマの信徒への手紙 3:25——

〈福音→〉神はこのキリストを立て、その血によって信じる者のために罪を償^{つぐな}う供え物となさいました。〈←福音〉

「血によって」というと、少しおどろおどろしい感じがするかも知れません。

旧約の時代、動物の供え物が捧げられるとき、祭儀の場に、その動物の血が流されました。しかし、旧約では、血は命の源であると考えられていました（創世記 9:4-5、レビ記 17:11,14）。従って、ここでパウロは主イエス・キリストという「罪を償う供え物」について語っているのですが、^{きも}肝となる説明句として「血によって」をユダヤ人たちに差し出したのです。

主イエスは十字架において血を流された（ヨハネ 19:34）、言い換えれば、主イエスは命を献げてくださった、または、主イエスは人間の罪を滅ぼすために、まことに死んでくださった、ということです。

神は、人間の罪の代価を支払うべく、完全なる犠牲を献げてくださいました。奇しくも、御子の「血によって」、私たちは罪から潔められたのです。

次に、本筋で3度繰り返されている神の義の啓示を踏まえつつ、それを補強する（ ）書きの部分を読むことにしましょう。

ローマの信徒への手紙 3:25-26——

²⁵（それは、今まで人が犯した罪を見逃して）、①神の義をお示しになるためです。²⁶（このように神は忍耐してこられたが）、今この時に②（神の）義を示されたのは、③御自分が正しい方であることを明らかにし、イエスを信じる者を義となさるためです。

神学や説教の中心命題に「神の義」・「正しい神」が据えられ、古来より議論され、説き明かされてきました。その点で、「神の義」の定義そのものではありませんが、二つの（ ）書きは別の観点から、正しい神のあり様を描き出しています。

私たちが普通、あの人は正しい人だ、正義の人だと言うときに、その人は「人の犯した罪を見逃す」ことはあり得ません。もし、罪を見逃したとしたら、その人はただちに「正義」の看板を降ろさねばならないでしょう。

では、なぜパウロは、正しい神が「今まで人が犯した罪を見逃して……」と言うのでしょうか。一つは、「見逃す」という言葉を、どのように理解するが問題です。

すなわち、「見逃し三振」のように、不注意あるいは集中力不足で、神は人の罪を見逃されたのでしょうか。しかし、これでは、人が罪を犯しているという深刻な事態において、全知全能の神に不注意が生じていることになります？！

この「見逃す」を「手を出さない」と言い換えてみましょう（竹森満佐一）。野球で打者が、「見逃す」というのと、「手を出さない」というのは大違いです。神が「罪に手を出さない」とは、神は人の罪を見通しておられたのですが、ただちに人が罪を犯している状況に介入されなかったということです（参照：マタイ

13:24-30 毒麦のたとえ)。つまり、神は罪人に対し、即刻罰を下すことを差し控えられたということです。

神は人間が罪を犯すのをご覧になっておられました。しかし、神は、手を出すことなく、罪に対する怒りと裁きを御手の中に握り締めておられました。というのは、神は忍耐をして、「今この時に」(ローマ 3:26) というカイロス(好機)を待っておられたからです。神はキリストを立てるといふ、「この時」を定められたのです。

「今この時に」、神はイエス・キリストを遣わして、人間を救う計画を開始し、十字架と復活をもってその御業を成し遂げてくださいました。私たちはまことの完成である御国への入場をめざして、この世を歩んでいます。

付け加えて言えば、「今この時に」以下は、「今まで」という人間の過去が踏まえられているので、その対照が鮮やかになっています。

ローマの信徒への手紙 3:25——

(それは、今まで人が犯した罪〔複数形：もろもろの罪〕を見逃して)

「これまでに犯してきた、罪、罪、罪」というのが、原意です。神を忍耐させたというのは、つまりは、神を苦しめたということです。罪の重荷によって、私たちが苦しんでいる以上に、神は苦しみ忍んでおられるのです。

主のよみがえりの「今日」と共に、私たちの一週間が始まる「今日」を「今この時に」という新たな思いをもって歩み出したいと願います。

ローマの信徒への手紙 3:26——

イエスを信じる者を義となさるためです。

最後の最後に、これから私たちが如何に生きるべきか、宣言されています。神の出来事から人の出来事へ、という絶妙な配列です。神による救いの出来事を仰ぎ、神の前にへりくだりなさい、ということです。

内容について、要点は二つです。

一つは、イエス・キリストを信じなさいということ、もう一つは、神に対し世に対し、義となさしめられた者として生きていきなさいということです。

私たちに問われているのは、主イエス・キリストにある者として、「正しく」生きていくことができますか、ということです。

その時に、神が忍耐強いお方であるということ想起すべきです。怒りをもって人の罪に「(罰を下そうと)手を出す」か、あるいは、忍耐をもって「手を出さない」でおくか、私たちの「正しさ」が問われています。難しいことですが、少なくとも、世の中で正義を振り回している人物とは異なります。

私たちは、パウロが3度告げ知らせた「神の義」のあらわれの下に、神から命を享けた者であります。神に対しても世に対しても、そして自分に対しても、「正しさ」のかけらも持ち合わせない弱いわたしであります。しかし、そのわたしを、神が支えてくださっています、福音によって支えられています。

マタイ福音書 5:48 主イエスの言葉——

「だから、あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい。」

神が正しいお方であられるように、あなたがたも正しい者となりなさい……これは、主イエスの教えです。

今日の説教の最後として語ります。

神は正義によって、正しく罪を裁かれました。今この時には、罪を見過ごしにされなくて、主イエス・キリストの十字架において、正しく罪を裁かれました。そうして、私たち・人間の罪は赦されました。

私たちは、救われた者として、神が正しくあるように、私たちもまた正しく生きていくように召されています。正しさをどう現したらよいのかと言えば、神を愛し、隣人を愛することです（マタイ 22:34-40）。

祈り

よみがえりの主、主イエス・キリストの父なる神よ
主の御名を讃美致します。

ローマの教会を形成し、支えていったパウロの言葉を、今日読みました。
どうか、これが、茅ヶ崎香川教会を形成し、主にあって教会を建てていく御言葉として、私たちの教会の、また、私たち信徒の土台となりますように。
もし、この御言葉が分からない、あるいは、受け入れないところがありましたら、聖霊の力によって光が当てられますように。
この祈りを、主イエス・キリストの御名によって御前におささげ致します。